

あがたい 縣居翁・賀茂真淵は郷土の誇り、日本の宝

ご挨拶

賀茂真淵翁遺徳顕彰会 会長 山下智之

埋火に 円みせる夜は をのずから
かたりぞ出る 春のあらまし

鷹 狩

おもほえず 雪ふみ分けて かりくらし
遠くこし野べは かへさにぞしる

同日よめる 冬のころ光治の家にあそびて

又ぞ来む けふは霜ふめ 後の日は
みぎりの雪に 跡なをしみそ

賀茂真淵（二十六歳）

真淵は「光治家」において詠いました。

最初に、引きこもりがちの夜は私の方から春のことを思い巡らすようにお話しが出てしまいます。次に、思いもしないで雪を踏み分けて、鷹狩をしようと遠くからやってきた野の辺りは、萱によって分かることです。そしてさらに、今日は霜を踏んでまた来よう。ですから、後の日に降る雪の跡を残念に思ってはなりませんよ。

この日はゆっくりと光治の家で、多くを楽しく語ったのでしよう。この光治は藤原光治という連尺において味噌醬油などを商売とした豪商です。屋号は「伊勢屋」と称していました。間口数十間もあったので水野忠邦が浜松城入城の際は先発の士三十数名が宿とした豪邸でした。

例大祭

賀茂真淵翁の命日に当たる十月三十日、縣居神社にて「例大祭」が齋行されました。真淵の後胤の方々や真淵にゆかりのある方々が参列し、厳かに営まれました。本殿の御扉が開かれるのは一年でこのときだけです。顕彰会からも会長、副会長が参列しました。



例大祭の様子

賀茂真淵翁を知ろう（5） 真淵の幼少時代

父母の教え

父政信は賀茂神社の神官。農業などにも多忙な中、和歌をたしなむ教養のある人だった。歌会で詠んでいる。

流れ出ぬ里の小川も氷とく初春風を水上にして
夢さめて昔覚ゆる手枕にあやしく匂う風の立ち花

母は信心深く、神仏を尊び人を大切に、貧乏な者を哀れみ乞食には物を与えたりする思いやりのある人だと人々が言い合っていたことを真淵は追想し「後の岡部日記」に書いている。

真淵は、もの心がつくようになると両親から和歌を教わった。母の前で和歌を詠むと母が古歌のよさを指摘する、すると、父までが顔を出す。しかも「万葉」などが話題になったと、真淵は後年「歌意考」で書いている。

自然に学ぶ

幼い真淵は、神社の杜から様々なことを学んだ。樹々が季節によって移ろう様や小鳥の姿や虫の声など、幼く純粋な心で感じ取っていたであろう。真淵は晩年、

世の中の人があの花や鳥を見習ったなら心素直な古代に返ることもあるうに」と詠んだ。幼い頃の体験が蘇ったものだろう。

六十九歳の「国意考」では、

世の中の生くるものを、人のみ貴しおもふはおろかなること也。
天地の父母の目よりは人も獣も鳥も虫も同じこと成るべし。

と、言っている。真淵を理解する上で欠かせない視点であり、現代にも通用するものだろう。

浜松近郊の真淵歌碑

「百区塚」

浜松市東区豊西町



うらうらと
長閑（のど）けき春の
心より 匂ひ出でてたる
山ざくら花

「百句塚」は明治三十九年四月、笠井町の福来寺境内に建立された。発起人は大木久市郎、補佐は発起人の俳諧の師であり、遠江を代表した旧派の宗匠・松島十湖である。建立時の俳人は百十六人、そのうち県外は四十四人を数えた。その後、百句塚は街の発展に伴い、御殿山、法永寺と二度の移転築造を経て、平成二十二年に十湖の故郷、豊西町に「十湖百句塚」と改称して移転築造された。



- ①賀茂真淵 真淵 60歳の作。内山真龍家の桜といわれる。
- ②本居宣長「しきしまの大和心を人とはば 朝日に匂ふ山ざくらばな」
- ③二宮尊徳「元日やことしも来るぞ大晦日」
「人の短をいふことなかれ己の長を説く事なかれ」
松尾芭蕉「ものいえば唇寒し秋の風」
- ④松島十湖「訪ふ人もひとふしあれや竹の春」

百区塚のご案内 十湖塚東交差点より南300mに案内看板があります。



七夕祭が齋行されました。



8月7日 縣居神社にて七夕祭が齋行されました。この日は台風のため、例年は参道を賑やかに飾る笹竹は拝殿に納められ、三浦豊宮司が祝詞を奏上され願いが叶うように祈願しました。また、「真淵が楽しんだ昆虫」と題して、桶ヶ谷沼ビジターセンター官長 細田昭博氏による興味深いお話を聴くことができました。

縣居神社本殿階段修理

長年風雨にさらされ本殿の階段が朽ち壊れました。顕彰会の予算内ですので、十分なことはできませんでしたが修繕しました。

